

第1回 国語

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 問題は□から□まであります。試験開始の合図があったら、まず、□から□まで問題がそろっているかを確認、次に問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3. 試験中は試験監督^{かんとく}の指示に従うこと。
4. 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為^{こうい}とみなすことがあります。疑われるような行動をとらないこと。
5. 試験終了の合図があったら、ただちに筆記用具^{しゅうりょう}を置くこと。試験終了後に、書きこんだ場合は不正行為とみなします。
6. 解答に字数制限がある場合は、句点（。）・読点（、）・かぎカッコ（「」）も一字として答えること。
7. 問題文は、作問の都合上一部改変しています。

受験番号	
氏 名	

一

漢字に関する次の問に答えなさい。

問一 次の1～5の――線の漢字の読みがなを答えなさい。

- 1 父の郷里へ遊びに行く。
- 2 この話には諸説ある。
- 3 備忘録をつけておく。
- 4 国民には納税の義務がある。
- 5 厳かな雰囲気がある。

二

問一 次の①～③の「」にあてはまる体の一部を表す漢字を一字で答え、慣用句を完成させなさい。

- ① 私は、「」をなで下ろした。
- ② 私の友人は、「」が広い人が多い。
- ③ 彼女の行動は「」に余る。

問二 次の1～5の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 ジュクレンの技に感動する。
- 2 カンゴ師を目指す。
- 3 コンナンな問題を解決する。
- 4 決勝戦にノゾむ。
- 5 オンダンな気候だ。

問二 次の①・②の「」にあてはまる漢字を一字で答え、ことわざを完成させなさい。

- ① 「」の耳に念仏
- ② 一寸の虫にも「」分の魂

三 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

世の中の失敗は二つのタイプに分かれると私は考えます。

「許される失敗」と「許されない失敗」です。

もっと簡単に言うなら「よい失敗」と「悪い失敗」です。

(あ) 「よい失敗」について説明します。

「よい失敗」とは「個人が未知なるものに遭遇して起きた失敗」です。

個人が無知であつたり、あるいは、何かミスして起きるタイプの失敗

です。この手の失敗をしたひとは、①なんらかの批判やペナルティを

受けることになります。その失敗で、ある程度、まわりのひとに迷惑

をかけてしまったのであれば、叱られるくらいは仕方ないかもしれま

せん。しかし、あまり責め立てたりするのは避けるべきです。

(い) 、その「未知なるものとの遭遇による失敗」は、そのひと

が成長する過程において、必ず通過しなければならないものだからで

す。

失敗なしに人間は成長しません。ひとは失敗して成長し、また小さ

な失敗を体験して、その分、成長していくというくり返しのなかで、

一つひとつの失敗経験から体験的知識を得ることで、次の大きな失敗

を起こさないために、徐々に軌道修正していくからです。

(う) 、

その失敗経験を将来への成功へと転化することもあるからです。

失敗と成長・発展の関係は、生物学の「系統発生と個体発生の仕組み」の原理に似ています。

私たちはどのようなプロセスを経て「人類」へと進化したのか、み

なさんも学校の理科の時間に習ったと思います。系統発生で考えると

およそ一〇億年前、地球に初めて動物や植物の祖先となる多細胞生物

が登場し、約四億六〇〇〇万年前に魚類が登場、その一部が両生類と

なり、そこから哺乳類が進化して、人類が誕生しました。

一方、私たちは母親の体内で受精卵から赤ちゃんにまで成長します

が、この個体発生においても、やはり系統発生と同様に、受精卵は細

胞分裂をくり返して、最初は魚類、次は両生類というプロセスを経て、

最後に「人間」の姿となります。

つまり、人類が誕生するまでの系統発生の一〇億年のプロセスが、

赤ちゃんが誕生するまでの個体発生の一年足らずのプロセスとして、

母親の体内で、再びくり返されているのです。

私は、人類が母親の体内で「A ↓ B ↓ C」とい

う進化のプロセスをたどって生まれてくると、人間が失敗から知

識を得ながら成長していくプロセスに共通するものを感じます。

人類はこれまで、その長い歴史のなかで、さまざまな失敗を経験し

てきました。その失敗の数々が人類を進化させ、文明を発展させて、

現在の私たちの世界につながっています。それは、一人の人間が成長

するときも例外ではなく、人類がたどった歴史と同じく、数々の失敗

を体験してこそ、初めて成長できるのではないかと思うのです。

この「ひとが成長するうえで、必ず必要となる失敗」が「よい失敗」なのです。

ですから、成長したいと望むひとは、Dです。

では、「悪い失敗」とはどのようなものでしょうか。

極端に言えば「よい失敗」に含まれないすべての失敗」が②「悪い失敗」と言えます。具体的には「単なる不注意や判断ミスで起こり、そこからは何も学ぶことができず、何度もうり返されてしまうような失敗」です。たとえ他人には迷惑をかけないものであったとしても「悪い失敗」です。失敗したひとにとって意味がなく、反省もされないで、習慣的にくり返され、やがて大きな失敗につながる③リスクがあるからです。

逆に、失敗したひとにとって意味があり、成長を促すきっかけになったとしても、周囲の人間に悪影響を及ぼすような失敗は「悪い失敗」です。

一人の人間が成長するために他人が甚大なダメージを受けてもいいはずがありません。その失敗によって得られるメリットとデメリットを比べたとき、圧倒的にデメリットの方が多ければ「悪い失敗」なのです。

失敗から体験知識を得ようとすれば、一つひとつの失敗が取り返し

のつかないほど大きな失敗につながらないよう気をつけながら、ダメージをリカバーできる程度の「よい失敗」の経験を積み重ねていく必要があります。

もし、それが「悪い失敗」であれば、いくら経験しても、個人として成長することはできません。

ただし、そこには一つ、課題があります。仕事や日常の生活で起きている大小さまざまな失敗のなかでも、経験したときにそこから④体験的知識を得られるような「よい失敗」は、決して多くないということです。

ただ、この課題を解決する方法はあります。自分自身の「よい失敗」だけでなく、他人の「よい失敗」からも体験的知識を得られるようになればいいのです。

そのためには、「自分自身が「よい失敗」をした」という数少ないチャンスが到来したとき、その貴重な経験から体験的知識を得るために有効な取り組みを実践することで、失敗の本質を理解して、より確実に「よい失敗」から体験的知識を身につけていく経験の積み重ねが必要になります。

そのような経験を積み重ねていけば、自分が起こした「よい失敗」だけでなく、他人の「よい失敗」からも効率的に体験的知識を学びとれるようになります。

結果、たとえ自分自身で「よい失敗」を経験する機会が少なくても、

資料として記録されている他人の典型的な「よい失敗」の原因を分析
することで、そこから体験的知識を学び、自身の成長につなげられる
ようになるのです。

(畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』)

問一 □(あ)・□(い)・□(う) に入る語をそれぞれ記号で答えな

さい。

ア たとえば イ なぜなら

ウ さらに エ まずは

問二 — 線①「なんらかの批判やペナルティを受けることになりま

す」とあるにもかかわらず、筆者が「よい失敗」を勧めるのは
なぜですか。その理由を具体的に述べた一文を抜き出し、最初
と最後の五字を答えなさい。

問三 □A・□B・□C に入る生物上の分類を記号で答え

なさい。

ア 魚類 イ 両生類 ウ 爬虫類
エ 鳥類 オ 哺乳類

問四 □D に入る文として、最も適当なものを、

次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア まじめに努力することを続けていくべき
イ なんとかして失敗を回避するべき
ウ 失敗するかしないかは気にせずに生きていくべき
エ 積極的に「よい失敗」を経験するべき

問五 — 線②「悪い失敗」と言えます」について、筆者の言う「悪い失敗」を次のア～オよりすべて選^ばび、記号で答えなさい。

- ア 失敗した人にとって意味がない失敗
- イ メリットよりデメリットが多い失敗
- ウ 周囲の人に悪い影響を与^{あた}えることがない失敗
- エ ダメージをリカバーできない失敗
- オ 個人としての成長が期待できる失敗

問六 — 線③「リスク」とはどのような意味ですか。意味が「○○性」となるよう漢字二字で答えなさい。

問七 — 線④「体験的知識を得られるような「よい失敗」は、決して多くない」とありますが、それを克服^{こくふく}するにはどのようなことをしていけばよいですか。本文中の言葉を用いて百字以内で説明しなさい。

四

次の文章を読み、後の間に答えなさい。

保健室に駆け込むと、部屋にはおとなのひとが二人いた。おじさんとおばさん。椅子に座って、ヒデおばと話していた。

びつくりしてわたしを振り向く二人の間から、たっちゃんが顔を出した。

「あれえ？ カワムラさん、かえったんじゃないの？」

たっちゃんは思いがけずわたしが戻ってきてうれしそうだったけど、おじさんとおばさんは——それからヒデおばも、①ちよつと困った顔でわたしを見ていた。

ヒデおばは「まあ、ちよつとよかったかもね」と言って、わたしを手招いた。

「ちよつとね、河村さん、たっちゃんとベッドで遊んであげて。一人だと退屈しちゃって、すぐ外に出てきちゃうから」

ドロップスを二つもらった。オレンジとハッカ。二つとも、②めずらしく最初から出して机の上のティッシュに載せてあった。

はい、とオレンジを渡そうとしたら、たっちゃんは「ぼく、そっちにする」とハッカのほうを指差した。

「ハッカでいいの？ 『はずれ』だよ」

「うん、へいき」

たっちゃんはわたしの手のひらからハッカのドロップスをつまん

で、おじさんとおばさんに「みて、みて」と言った。「パパみて、ママみて、ハッカなめちゃうよ、ぼくできるんだよ」——両親だったんだ、この二人。

たっちゃんはブドウを食べるときみたいに顎を上げ、くちびるをとがらせて、ぱくつとドロップスを口に入れた。

顔がしょぼしょぼとしぼむ。でも、吐き出さずにがまんした。「すごい、たっちゃん」とお母さんが拍手をした。その顔をちらっと見て、気づいた。お母さんの目には涙が浮かんでいた。

わたしたちがベッドに入ると、ヒデおばはふだんは使わないカーテンを端から端まで①と閉めた。

外が見えない。でも、たっちゃんはそれが逆に気に入ったのか「ひみつきちみたい」と笑って、ベッドに座ったまま掛け布団を頭から

②かぶって、あかずきんちゃんみたいに顔だけ出した。

「あのね、ぼくね、しゅじゅつするの」

いきなり――。

「あしたからにゅういんするの、おばあちゃんちのちかくのだいぐくびょういんに」

笑いながら――。

「それでね、えーとね、インナイガッキューっていうのがあるの、そこ。びょういんのなかのがっこうなの。しゅじゅつ、なんでもしない

といけなから、ばく、そこにんこうするの」

コリコリッ、とドロップスと歯が当たる音が聞こえた。ハッカ、お
いしくない、と息を歯ですうすう鳴らしながら、笑った。

両親と先生の話し声は低くて聞き取れない。ただ、お父さんもお母
さんもヒデおばにお礼を何度も言っているような気配だった。

もつと耳をすまして話を少しでも聞こうと思っていたら、廊下から
ばたばたと誰かが走ってくる音が聞こえた。

「すみません、河村さん来てませんか？」——予想どおりのひとだっ
た。はあはあ、ぜえぜえ、と息を切らして、学校中走りまわっていた
のだろう。

わたしはオレンジのドロップスを舌と上顎の間に押しつけて、たっ
ちゃんにも、静かにね、と口の前で人差し指を立てて見せた。

「来てないよ」

ヒデおばは、そっけなく言った。

「そうですか……」と、細川先生の声は半べそをかいているみたいに
震えた。

「でも、職員室で待ってれば来るわよ。待ってなさい」

「え、でも……」

「見てわかるでしょ、お客さんと話してるの。邪魔しないで、職員室
で待ってなさい」

「来るって、なんでわかるんですか」

「あんたよりたくさん見てるからだよ、子どもを」

「そんな……わたしだって……」

「おなかが痛くて泣いている子ども、何人見てる、あんた」
怖い声だった。

「膝をすりむいて泣いてる子ども、何人見てる」
もつと怖くなった。

「子どもはにこにこ笑ってるだけじゃないんだ」

すごく怖い——けど、その声は、おじいちゃんとおばあちゃんとお
父さんとお母さんをぜんぶ合わせたみたいなの、頼もしい声でもあった。

細川先生がなにも言い返せずに立ち去ったあと、ヒデおばはたっ
ちゃんの両親ともう少し話をしてから、カーテンを開けた。

「たっちゃん、そろそろ帰るって、お父さんとお母さん」

「ぼくも？」

「あたりまえでしょ」

横からお父さんが「たっちゃん、ヒデコ先生にお別れなさい」と
言った。「いままでお世話になりました、って」

お母さんは黙って、ハンカチを目元にあてていた。

たっちゃんはお別れの意味がよくわからないのか、きょんととして
うなずき、「ヒデコせんせい、またね」と手を振るだけだった。こっ
ちのほうが悪しくなって、たっちゃんの手術のことが心配にもなって、
胸が熱くなった。口の中でドロップスが溶ける。悲し涙が溶けて、広

がって、染みていく。

ヒデお婆は、白衣のポケットに手を入れた。

「たっちゃん、もうハッカのドロップス食べた？」

「うん、おいしくないからのんじやった」

「じゃあ、お別れだから、もう一個あげる」

緑の缶をポケットから取り出して、カラカラ、と音をたてて振った。

「たっちゃんがいちばん欲しいドロップス、言いなさい。それが出たら、手術が成功して元気に遊べるよ」

うそ――。

③だめ、それ――。

「ほく、ブドウがいいなあ」

ほら、やっぱり。

わたしはあわてて口の中のドロップスを呑み込んで、ヒデお婆に、だめです、やめてください、と言おうとした。でも、オレンジの甘みで口の中がべたべたして、呑み込んだドロップスも喉にひっかかったみたいで、声が出ない。

「なにが出てくるかわかんないけど、ブドウだったら、うれしい？」

「うんっ」

「先生もううれしいけどねえ、どうだろうねえ、うまくいくかどうかわかんないよ」

そんなのやめて。ゲームにしないで。絶対に負けるゲーム、たっちゃん

んにやらせないで。

ヒデお婆は蓋を開けた缶をまた軽く振って、たっちゃんの手のひらに、ころん、とドロップスを落とした。

紫色のドロップス――「やったーっ」とたっちゃんは歓声をあげた。

ブドウ。間違いない。あの色、あの形は、ブドウのドロップスだった。X い缶のやつにしか入っていないブドウが、Y の缶から出てきた。

お父さんとお母さんも手を取り合って大よろこびだった。やったな、やったね、すごいな、よかったね、と二人とも涙声でよろこんでいた。たっちゃんは、あーん、と口を大きく開けて、ブドウのドロップスを舌の先に載せた。口を閉じて、ぺろん、ぺろん、となめて、「おいしいっ」と笑った。

きつと、その味、うれし涙だ。そして――何週間か、何カ月か、何年先かわからないけど、④ たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合ってうれし涙を流すんだろうな、と思った。信じてる。不思議な奇跡が起きたのだから、それ、信じていい、と思う。

たっちゃんが両親と一緒に帰ったあと、ヒデお婆は「あんたも食べる？」とドロップスの缶を差し出した。

「あの……」やっぱり、不思議だった。「なんでブドウが出たんですか？」

「なんであって、入ってたから出たんでしょ」

そんなことじゃなくて。わたしはドロップスの緑の缶と赤い缶の違いを説明して、緑の缶からブドウが出ることはありえないことを伝えた。

でも、ヒデおばは驚いた様子もなく、「あんたのもブドウだよ」と言った。

「わかるんですか？」

「出してごらん」

缶を受け取って、手のひらに出した。一個だけのつもりだったけど、勢いがつきすぎて三個いっぺんに——ぜんぶ、ブドウだった。

びっくりして、残りのドロップスも手のひらに出した。

ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ……。ぼうぜんとしている隙に、ヒデおばは机のひきだしを開けて、赤い缶のドロップスを取り出した。

「たっちゃんがブドウが好きだっていうの、聞いてたから」

そっけなく言って、中身がぎっしり詰まった赤い缶を振りながら、「面倒めんどうだよねえ」としかめつっらになる。

「そこから出して……入れたんですか、こっちに」

最初から机の上に出ていたオレンジとハッカのドロップスは、赤い缶に入りきらなかったぶんだったのだろう。

「ちょっと、こんなにいっぺんに出しちゃうと、しけっちゃうじゃない」

叱られた。「食べるぶんだけ食べて、あとは中に戻もどきなさい」とにらまれた。でも、わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて、「ああ、もう面倒だった面倒だった」と大げさにため息をつく。

わたしはブドウを一個だけ口に入れ、あとはぜんぶ緑の缶に戻した。ぺろん、ぺろん、と舌ではじくようにドロップスをなめていると、ブドウの味や香りと一緒に、⑤自然と笑い声も出てきた。甘いなあ、ドロップス。おいしいなあ、すごく。

ヒデおばはそっぽを向いたまま「どうするの」と言った。「細川先生探しに来たの、聞こえたでしょ」

「はい……」

「職員室で待ってる、って。伝言、伝えたからね、あとはあんたが決めなさい」

違うじゃん、職員室で待ってろって言ったのヒデおばじゃん。待てればわたしは絶対に来るから、って言ったじゃん。絶対に、とまでは言わなかったかな。

ぺろん、ぺろん、とドロップスをなめる。カチン、カチン、と歯に当たる。甘くて固くて、少しずつ溶けて、広がって、染みて。

「いつでも来ればいいから、ここに」

ヒデおばは赤い缶をひきだしにしまって、「でも、もうドロップスはあげないよ。あんた虫歯があるのに歯医者行ってないでしょ」と、また怒った声で言った。「そういうの、ぜんぶわかるんだからね」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

「細川先生待ってるから、行くんだったら早く行きなさい」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

ふふつと笑った。甘いものが口の中にあると、どうして頬がふわつとゆるむんだろう。

奥歯で噛んだ。かけらにして、ごくんと呑み込んだ。

ゆるすかゆるさないかは、まだ決めていない。ゆるしても、忘れない。たぶん一生。

でも、口の中に残った甘いブドウの香りが、行こうか、と言ってくれた。

わたしはランドセルを背負い直して、ぺこりと頭を下げた。

ヒデお婆は、『保健室だより』の古いのを読み返しながら「ドロップスのこと、ナイショだからね」と言っ、じろつとわたしをにらんで、初めて笑った。

（重松清『ドロップスは神さまの涙』）

問一——線①「ちょっと困った顔でわたしを見ていた」とあります

が、その理由として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「たっちゃん」と仲のよい「わたし」が保健室に来てしまったことで、「たっちゃん」がおとなしくじっとしていられなくなってしまうから。

イ 四人で楽しく話していたところへ、帰ったはずの部外者の「わたし」がやってきて、気まづくなってしまうから。

ウ クラスの問題児である「わたし」が、ようやく帰ったと思っていたのに、保健室に戻って来てしまい騒がしくなってしまうから。

エ 「たっちゃん」についての大事な話をしていたところへ、「わたし」がやってきてしまい、話の内容を聞かれてしまうから。

問二——線②「めずらしく最初から出して机の上のティッシュに載

せてあった」とありますが、なぜ、ドロップスは最初から出ていたのか。「ゝから。」に続くように本文中から四十字程度で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三

(1)

(2)

にあてはまる語として最も適当なものを、

次のア～カより選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|----------|----------|
| ア | (1) ぎっくり | (2) きっちり |
| イ | (1) ぎっくり | (2) すっぽり |
| ウ | (1) びったり | (2) すっぽり |
| エ | (1) びったり | (2) がっちり |
| オ | (1) ぎっしり | (2) がっちり |
| カ | (1) ぎっしり | (2) きっちり |

問四

——線③「だめ、それ——」とありますが、なぜ「わたし」は「それ」を「だめ」だと思ったのか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 「たっちゃん」だけ二個もドロップスをもらえることが許せなかったから。
- イ 「たっちゃん」の好きなブドウのドロップスが缶から出ないと思っていたから。
- ウ 「たっちゃん」の好きなドロップスが出たとしても手術が成功するとは限らないから。
- エ 「たっちゃん」の好きなドロップスを、自分が先に食べたいと考えていたから。

問五

X

Y

に入る色を漢字一字でそれぞれ答えなさい。

問六 ――線④「たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人

で手を取り合つてうれし涙を流すんだろうな、と思った」とありますが、「たっちゃんのお父さんとお母さん」が「もう一度、二人で手を取り合つてうれし涙を流す」時とはどのような時と考えられますか。四十字以内で答えなさい。

問七 ――線⑤「自然と笑い声も出てきた」とありますが、この時の

「わたし」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「たっちゃん」と同じく、「わたし」も大好きなぶどうのドロップスをもらえて、以前より「ヒデおば」が好きになった。

イ 「たっちゃん」の好きなドロップスが出るように事前に細工

していた「ヒデおば」の、配慮はいりょが見えてうれしかった。

ウ 自分を探しに来た「細川先生」から、嘘うそについてまで自分を守ってくれた「ヒデおば」のことを考えてはにかんだ。

エ 一度に出てきた三個のドロップスが、すべて同じ種類のドロップスだったことを思い出しておかしくて仕方がなかった。

問八 本文の内容について説明したものとして最も適当なものを、

次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「ヒデおば」は「わたし」に対して、あえて冷たい態度で接することで、病人のいる保健室に近づかせないようにしている。

イ 「わたし」は「ヒデおば」のすべての言動に対して、どこか家族のような温かみを覚え、親近感いたを抱くようになっていく。

ウ 「わたし」は素っ気ない態度の裏側にある「ヒデおば」の優しさに触れ、避けていた「細川先生」と向き合うようになっていく。

エ 「たっちゃん」は自分の手術が成功しないと思っているが、そのことを表面には出さないように、弱音を吐かず強がっている。